

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
しょうじ さきち 庄 司 佐吉	男 性	30 歳	設楽町田口

「シベリア抑留 4年の捕虜生活」

「行商のうた」より転載，部分修正

昭和20年8月18日，軍命令により終戦を知り，その後，乱れた軍紀の中で逃げ惑ううちにソ連軍に捕らえられ，シベリア送りとなってしまった。

初めて見たシベリアの広大な針葉樹林は，山一つない真っ平らの平原に限りなく続いていた。4kmごとに1ヶ所の捕虜収容所は，その中であって先着捕虜たちの逃亡を拒み続けていた。仮に，チャンスを得て逃亡してみたところで，たちまちソ連兵士に射殺されるかオオカミの餌食になるか，そのどちらかの道しかない。かつて，ソ連のベテラン囚人でさえ次の収容所まではたどりつけなかったという，厳しい条件の揃っている流刑地であった。

シベリアの奥地は日本と違い，1年のうち5月から9月始めまでは真夏の暑さが続き，残る季節は猛烈な冬であり，春も秋もない一足とびの2季ぐらしである。冬は零下35度でも屋外就労を強要され，心身ともに強靱な者でない限り生命を保つことは難しい。昭和20年冬の初体験，多くの日本人捕虜が飢えと寒さのために，シベリアの冬将軍に勝てずに死んでいった。その戦友たちの冥福を祈り，戦争の傷あとの大きさを振り返ってみたい。

○ 自決命令が……

突然のソ連参戦により戦争は急転直下，敗戦の道をまっしぐら，遂に8月15日，天皇陛下の玉音放送によって内地の日本人は涙をのんで悲しみ，放心状態で仕事も手につかなくなるとか。後日，人づてに聞き知ることになった。

しかし，米英撃滅を唱え，戦況の悪化とはいえ苦闘しつつも連勝を続けたわが満州軍兵士には，敗戦は青天の霹靂であった。天皇陛下に忠誠を誓った兵士たちは，「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓を信奉して，満州のあちこちの山の中で，「全員自決」を余儀なくされたことも数多く，悲しい事実であった。

各地で陣地を焼き払い，その硝煙と地獄絵は筆舌に尽くしがたく，数日に渡って真夏の太陽を覆いつくした。私たちの中隊も例外ではなかった。

「本日15時，全員自決スベシ」

この命令を私が書いて報告した。実のと



満州へ侵入するソ連軍 図説満州全史より

ころ、私はこの自決命令にも冷静そのものであったが、それは勇気でも度胸でも何でもない。出征の時、「見苦しい死に方をするな！」、との父の言葉を忠実に守ろうとしたからに他ならなかった。

軍律きびしい中隊命令によって、決別の酒宴が大きな旅館の2階の大広間で開かれた。百数十人の将兵は真新しい軍服姿に早替わり、飲み食いが始まり、やかましくなってきた。酔いが回り始めて、人間本来の生の声、それは生への執着か。「なぜ、死ななければならぬのか！」と、その声は次第に罵声に変わり、酒の力を借りて乱暴になり、壁に備え付けられた等身大以上の大鏡に向かって一発、ごう音と共に鏡はこっぴみじんに砕け散った。その罵声に同調する兵は、2人から3人へ、ついには中隊の過半数の声となり、やがて命令を出した中隊長襲撃の声に変わっていった。あわてふためいた中隊長は、直ちに命令撤回を宣言した。

「全員逃亡スベシ！」 中隊命令を再び私は書かされた。

○ 捕虜生活へ

幸い、馬部隊だった私たちは、馬の足を頼りに北朝鮮から豆満江を泳ぎ渡り、白頭山に入り馬賊になるを合い言葉に、昼夜馬上の人となって満州領へ入り、本隊と合流した。空を焦がした硝煙も次第に薄らぎ、やがて1週間もの間、満州の原野をさまよううちに、自動小銃を手にしたソ連軍に捕らえられた。1集団ずつソ連領の山中に送り込まれ、天幕の生活を強いられ、飲む水にも困り果てながら、シラミの猛襲と空腹続きの捕虜生活は始まった。

その後、100キロ行軍が始まり、足の弱い者は自動車輸送もするという通訳の声にも耳を貸さず、足裏にできるマメにも耐えながら、その道程を歩き続けた。雨が降れば道なき道に列をなし、雨外とうを頭からすっぽりかぶり、一夜中立ち眠りする苛酷さにも耐えて歩き抜いた。続いて、1ヶ月がかりのシベリア行き貨物列車に詰め込まれての長旅となった。毎日起こる大小便の処理、数千人の日本人捕虜が一斉に列車から飛び降り、赤い夕陽に向かっての排泄は空前絶後で、壯観の一語に尽きる大集団の行動絵巻であった。

その列車がアムール川を渡り、ソ連の誇る自然の流刑地シベリア奥地に移されたのであった。真夜中の収容所到着は身の縮む思いだった。収容所に収容されるまでに長い長い時間がかかり、凍原の中で足踏みしながら待たされた。その凍てついた闇夜の中、早くも近くの森の中にオオカミの吠える声を聞きながら、四隅に見張り台のある半洞窟の収容所に入れられたのであった。

「勝てば官軍、負ければ賊軍！」

ここに始まった労働は、すべてノルマによって食料配分が行われ、たちまちにして減食につながるのが常で、辛い



軍隊時代の庄司氏

ことだった。きつい労働の上、栄養状態が悪いため、ある者は伐採作業中に木の下敷きとなり、ある者は材木の積み込み作業中、滑り落ちた材木に頭を打ちつけて即死した。材木についての流血はたちまち凍



極寒の針葉樹林帯

りつき、幾日も現場に放置されたままであった。

また、空腹に耐えられず毒キノコを食べ、収容所のうす暗いランプの下で息絶えた者も数人いた。食べものといっても、家畜の飼料以下で、それも連日の作業ノルマに追われての減食に、多くの捕虜たちは、飢えと寒さのために、何の病気でもないのに、栄養失調で化け物のようにやせ細り、数知れない人が死んでいった。さぞ無念であったろう、その声と魂が、今も私の五体の奥深いところに渦巻いて消え去ろうとしない。

シベリアでの4年の抑留生活を解かれ、ナホトカの港で船に乗り、日本海の荒波を乗り切って舞鶴に上陸した。1週間にわたる身上調査が済んで心も平常に戻ると、やがて鈍行列車で一路故郷に向かった。なつかしのふるりの土を踏むと、忘れられない顔・顔に迎えられて生家に着いた。母は神仏の加護を願い、毎朝星をいただいて産土神へお百度参りをして、私の生還を待っていてくれた。もはや頭髪も大方は白くなり、肉体的、精神的な疲労は隠すすべもなかったが、私を見るなり、「破顔一笑」もたちまちに涙と化し、止まることを知らなかった。私は恥も外聞もなく、ひどく小さくなった母と抱き合っ、お互いの願望達成の喜びが直に肌に伝わってくるのを感じた。

戦争は人間が人間を殺し、あるいは傷つけ、多くの兵隊は憎悪に燃えて戦う。戦争の恐ろしさは、その道を通らなければ到底理解することはできないとしても、この一文が、日本の戦争を知らずに生きてきた、戦後生まれの若者たちに、戦争を起こさず、戦争に巻き込まれず、ひたすら平和を愛する、信念の強い人間として生き抜くことを請い願ってやまない。

＜庄司氏が残された うた＞

- ・ 蝸壺に 腐臭を放つ戦死者の 数をよみつつ 国境を越ゆ
- ・ 露助奴と 腹に思えど捕虜の身の 日を重ねつつ やせ細るのみ
- ・ 三千の 捕虜の排泄始まりて 夕陽に向くを 不敵と思ふ
- ・ この河を 渡れば日本とだまされて シベリア深く 連れ込まれたり
- ・ 盗み来し 生の大豆を音たてず 噛むも命を 保たむがため
- ・ 苦痛なき 栄養失調 友の死に 明日はわが身か 死んでたまるか